

# タイの華人同姓団体

## —家族会と族親会に注目して—

吉原和男（アジア地域研究所・特任研究員）

### 1、用語およびタイ国における華人社会の概況

「華人」とは中国からの移住者を祖先とする現地国籍の住民、あるいは中国・台湾などから移民して帰化によって現地国籍を取得した住民を指す用語とする。国籍において中国（中華人民共和国）や台湾（中華民国）籍の住民は「華僑」として区別される。祖先が清朝時代に移住した人々も少なくない。漢字で表記すると弁別に留意が必要であるが、Overseas Chinese, Ethnic Chinese という英語表現を簡略に表現してチャイニーズという日本語表記も可能であろうか。華人社会とは言い換えれば華人のコミュニティである。

中国からタイへの移住者の入国・帰国者数の累計は1932年から1945年までの間では入国者総数が約47万に対して出国者総数が約38万であり、純増数でみると約9万人であったが、第二次世界大戦後には大きく回復する。すなわち、1946年から1955年の間に入国が約27万に対して出国が11万であった。約16万人の純増であった。しかしこれは、入国者数がほぼ半減し、出国者数もほぼ三分の一まで落ち込んだ結果である。

中国からタイへの移住者数が統計的に最大であったのは、1918年から1931までの間であった。入国者数累計が約133万人に対して出国者累計は約83万人を下回り、純増数は約50万人であった。第二次世界大戦前後の時期における中国の混乱の影響が人口の二国間移動に反映していると考えられる。

一方、タイ国内に定住化した中国人の人口、すなわち「華僑」人口を見ると、1919年の約26万人から1937年の約54万人と20世紀前半には増加をたどっていた。しかし第二次大戦後は、中国からの新たな入国者数が大きく減少したためにタイ国内の華僑人口は漸減した。それでも第二次大戦後の1947年には約48万人の華僑がいた。しかし、その後に帰化人口が増えたこともあり、「華人」の人口が増えた一方で、華僑の人口は1970年には約31万人、1987年には約18万人まで減少した。

上述の人口動態が華僑・華人の団体結成にも大きく影響したと思われる。つまり、中国から新たに入国した人々の社会生活を支える親睦・相互扶助団体の増加をみている。

タイ国内の同郷団体は、その前身団体も含めると、19世紀後期から20世紀の前半までにほとんどが成立している。今回の報告の主たる対象である潮州人に関して見ておくと、泰国潮州会館は1896年に中国仏教寺院である大峰祖師廟を前身組織として成立し、1938年に泰国潮州会館に組織変更している。タイ国潮州会館の成立は、他の方言・同郷会館と比較成してむしろ遅いくらいである。そして潮州会館の傘下にある県別の同郷会館が成立したのは、ほとんどが第二次世界大戦直後の時期である。このことは新規の入国者数増加が反映していると考えられる。

タイ国籍に帰化した華人によって宗親総会のような大規模な同姓団体が結成されたのは、後続世代による華人文化継承と華人社会の持続的発展を願いつつ、華人社会のネットワーク緻密化と統合性を高める社会装置として機能させるためであったと言えるであろう。それについては今回の報告では詳しく述べない。

さて、旧潮州府の全体的な同郷団体である潮州会館とその傘下にある県別の同郷団体がいわば先発組織であるのに対して、同姓団体は後発組織であった。中国にあっても遠地とは日常使用言語と生活慣習の違いは小さくないのに、外国であるタイ国への新規入国者にとっては使い慣れた生活用語となじみの人間関係は安心できるものであったであろう。

中国人（漢民族）にとって家族とその延長線上にある親族組織は生活基盤であり、人間関係の基礎であった。生まれ育ったコミュニティから遠く離れた外国に移住した際に新し

い社会文化的な環境に対応する適応方途はいくつかあろうが、同郷・同姓団体の結成あるいはそれへの加入・所属はその一つであろう。

## 2、同姓団体とは

今回の報告の論題にある「同姓団体」とは、具体的には「##氏宗親会」や「##氏宗親総会」などと呼ばれる中国姓を掲げた団体である。タイ、マレーシア、シンガポール、香港などで中国・台湾から移住した人々やそうした人々を祖先に持つ現地居住者が、主に相互扶助と親睦を目的にして、組織した任意加入組織（会員制）である。

漢民族の父系出自主義に基づき、父から受け継いだ姓が同じである人を父系血縁があると見做して家族・親族の延長線上に位置づける、独特なイデオロギーに支えられた団体である。

家族や親族（宗族）は生まれこむ組織であり、任意加入の組織ではない。しかし中国大陸において、同姓であることを理由にして、互いの生活圏がほとんど交差しなほど遠方の宗族の連合体が、同姓であることを理由にして世俗的・政治的意図によって結成される時には、父系血縁関係に基礎づけられた親族組織としての性質は弱まる。そうした組織においても共通の遠祖に対する祖先祭祀は実施されるものの、それは大義名分に過ぎない。大都市に建造される合族祠（広州の陳氏書院など）はその好例である。

国外・海外の移住民の社会においては、こうした祖国における宗族組織やその連合体を先行組織あるいはモデルにして任意加入団体を創設することが考え出されたのである。

同姓団体にはいくつかの類型が考えられるが、ここでは2類型について述べる。

＜宗親会＞ 日常生活用語としての中国語方言を共有する人々によって結成されることが多い。概して会員本人の出身地や先祖（直近世代の移住者）の出身地が同じである。

＜宗親総会＞ 上記の宗親会よりも組織構造の規模が大きい団体であり、中国語方言が異なる同姓の宗親会の有志が協同して結成されていることが多い。あるいは、バンコクにある宗親総会の地方組織としての宗親会もある。

以上の2つのタイプの同姓団体は、家族および宗族とは大きく異なる点を再確認しておきたい。家族と宗族においては、父系血縁者によって構成されていることが祖先祭祀儀礼や族譜等の歴史資料によってかなりの程度認識されているので、構成員間の相互の血縁関係の認知度が高く、父系血縁がある故に同姓であることが自覚されている。しかし、中国外の海外華人社会の宗親会と宗親総会においては、父系血縁関係がある人々だけによっては規模が大きい組織を結成できないので、一つの新しい組織原理が海外で考案されたのである。つまり、「父系血縁関係があるから、同姓である」という中国伝統社会においては当然視される認識を逆転させたイデオロギーが創り出されたのである。すなわち、「同姓であるからには、先祖を遠く遡ればどこかの世代で必ずや父系血縁があるはずである」という考えである。

バンコク大都市圏には1990年代には約90の同姓団体が存在した。これらについて悉皆調査を実施した訳ではないが、このうち約60団体が宗親総会であり、宗親会が数団体あることがわかった。そして残りの団体については、これまで団体名以外については不明であったが、近年の個人的現地調査によって興味深い事実が少しずつ明らかになってきたので、今回の報告とさせていただきます。

それらは、たとえば「##族親会」、「##家族聯誼会」という名称を持つ団体である。

### 3、陳姓の同姓団体、総会およびその傘下の家族会・族親会

まず上位団体の説明から始める。泰国陳氏宗親総会は1962年に成立し、1977年には豪大な大宗祠を建造している。この団体は潮州、海南、広東、福建、客家、そして台湾の各方言集団に属していた陳姓の人々が協同して結成した。

1962年1月にバンコク在住の陳姓の有力者9人が宗親総会の結成を決めて6月に政府の教育部へ認可申請した。これを受けて設立準備委員会が発足したが、中心者は広東省東部の潮州出身者や海南島出身者であった。後者は既に成立していた海南陳家社（1946年成立、宗親会タイプ）の理事長であったので、そこに設立準備委員会の事務所が置かれた。顧問には陳姓の警察官僚が招かれて就任している。他の委員は各方言集団の会館の役員であった。

設立の際の中心者の出身母体から考えれば、陳氏の宗親総会は、従来は出身地あるいは方言集団によって分節化されていたタイの華人社会を横断して新たな、しかし華人にはなじみのある社会結合原理である父系血縁・同姓関係を活用することによって、華人社会の統合性を高めるものであった。

このような陳氏宗親総会に包摂される下部組織に注目すると、宗親会タイプの団体のほかにそれよりも組織の構造規模が小さい組織が複数あることに気付く。たとえば、広東省（旧）潮州府の潮安県の出身者によって構成される陳姓の団体としては以下の3団体がある。

#### （1）泰国秋溪陳氏延華堂総会

陳氏宗親総会が成立した後の1983年に潮安県秋溪村出身の陳姓によって結成された。

#### （2）潮安東鳳郷族親会

1971年結成。構成員は郷里では同じ宗族に所属していたのであった。

#### （3）旅泰古巷同郷会

潮安県出身者によって結成された。組織名称に同郷会とつくが、陳姓単独で構成される郷であり、かつては陳姓の宗族が占めていた地区である。

このほかに、同じく潮州系としては普寧県出身の陳姓によって結成された以下の団体がある。

#### （1）旅泰普寧赤水郷親会

#### （2）旅泰普寧横山郷陳氏宗親会

#### （3）泰国榕江潁川宗親会

同じく潮陽県出身の陳姓による団体としては泰国潮陽西岐郷陳氏宗親会がある。同じく澄海県出身の陳姓による団体として、澄海建陽郷聯誼会があり、揭陽県出身の陳姓による団体として旅泰陳氏西山逸士公総会がある。

このほか参考までに潮州系ではない別の方言集団の陳姓団体としては、広東系の泰京広肇陳潁川堂（1928年に陳家館として）、海南系の海南陳家社（1946年）がある。

現地のタイ語が華人社会においても共通言語ではあるものの、書記体系としての漢語は別にすると、華人の家庭で渡タイ一世を中心に維持されてきた中国語の方言は、話し言葉としての異なる方言とは互いに通じ合えないことが、方言別の組織が結成された一因であった。この言語事情は同郷団体の分立に顕著に見られるが、同姓団体においては、家族や宗族的な人間関係が故郷を遠く離れた海外においても継承されているため、故郷の父系血縁関係が濃厚な地理的範囲が自ずと限定的になっているのである。旧体制下における行政単位としての郷は大きな村と呼べる規模の集落であり、宗族の空間的展開の基盤と見な

されよう。異姓間の通婚が父系出自原理を支えていたので、母系を通じた血縁関係は郷を越えて繋がり、県域を越えることもあったが、同じ方言が通じる範囲に収まるが多かったであろう。従って、異姓ではあっても同郷内の類似団体の構成員間には母の里、娘の嫁ぎ先という関係による人間関係が認識されることが普通であり、異姓の団体との交流は配偶者選好や仕事に関わる信頼関係の醸成にとっても一定の重要性が認められたと考えられる。

なお言うまでもなく、宗族は共産党政権樹立後に封建地主制度の解体と共に姿を消すが、人々の宗族意識はしばらく残存したし、宗族は海外在住の華人にとっては故郷における人間関係の基盤のかなり重要な一部分であった。

以下では、上記の団体のうちいくつかをやや詳しく紹介する。

### ＜泰国秋溪陳氏延華堂總會＞

12世紀末に潮州府に隣接する福建省の泉州より潮安県觀塘（鶴塘）へ移住した陳増公・担公の子孫が移住した先の1つである秋溪（村）からは後世になって海外移住者多く出た。タイにおける最初の組織は1973年から1975年にかけて34人によって設立準備がされた。組織名称は初め旅泰秋溪陳氏延華堂互助社（延華堂は郷里にあった大宗祠の名称）であったが、1982年に現在の名称に改称した。1983年に会所開設。会員子弟へ奨学金を授与。役員に輩行字を共有する者が多いことは組織内に宗族的な人間関係が強いことを示している。その輩行字の根拠となる詩も伝えられている。

初代理事長は第47世。草創期の副理事長・理事長であった陳徳欽氏は1916年郷里にて出生。青年期に渡タイ。

1976-83年の理事長であった陳英木氏は1927年頃機械・車両販売業の経営者となった。タイ国出生。潮安同郷会名誉理事。機会商同業公会発起人・理事長。

### ＜潮安東鳳郷族親会＞

現在は潮州市東鳳区の一部となっている東鳳村出身の陳姓による団体。1971年から故郷で遊神盛会が行われる農曆正月25日に懇親会を実施。

同会が1986年に調査したところ男女合計約400人の同郷族親がタイ国内にいたことが判明。婚礼や葬儀の折の互助活動を行う。

永遠名誉理事長である陳銳挙氏は1912年郷里で出生。1924年来タイ。缶詰食品製造業を興して成功。各種慈善団体への多額の寄付。中華総商会、潮州会館執行委員、潮安同郷会、陳氏宗親總會の理事などを歴任。

### ＜旅泰古巷同郷会＞

1980年代現在では潮州市古巷区となっている古巷には2万人以上の陳姓が住む。海外移住先では東南アジアが多く、中でもタイが最多である。1980年代後期には少なくとも2000人が居住すると言われている。

同郷・同姓の20数名の陳姓が結成にあたって決めたことは、毎年農曆正月19日に故郷での遊神盛会（祭礼）の日にレストランにて懇親会を開くことであった。数年後に参加者数は400人以上となった。

1979年には寄付金を集めて会所を購入している。1983年からは奨学金、翌年からは助学金の支給を行っている。

理事長の陳文初氏は1923年生まれ。青年期に郷里より渡タイ。缶詰食品や冷凍食品の企業を経営。金融業にも進出。潮安同郷会の常務理事。

参考まで、潮安県出身の他姓によって結成された上記と類似の同姓団体は次のようである。

- (1) 旅泰潮安石礐溪郷劉氏家族会 劉姓  
 タイには約3000人の族人が居住。1964年成立。1973年には郷里へ探親する者があつた。タイへ村の宗族の開祖の香火を持ち帰る。祖祠を建造する意向が固まる。1983年に政府に登録。婚葬慶弔礼節。1984年に郷里を皆で訪ね祖先墓を修理。
- (2) 旅泰急水仙美郷李氏族親会 李姓  
 宋代の開村、タイへの移住者が最多。正月10日に聯歡会。1971年設立。
- (3) 旅泰上哺郷黄氏家族会 黄姓  
 3月13日の林水夫人聖誕、年末の謝神、正月聯歡を行ってきた。1980年代中ごろに家族会設立。
- (4) 旅泰潮安独樹郷莊氏家族会 莊姓  
 1980年設立
- (5) 旅泰潮安銀湖郷聯誼社 吳姓  
 1982年成立。郷の人口の99%は吳姓。タイ在住者は約600人、故郷で奨学金授与
- (6) 旅泰潮安江東都葛外郷郷親会 王姓  
 1987年成立。正月5日に聯歡、
- (7) 旅泰潮安崗湖郷黄氏家族会 黄姓  
 1981年成立。

陳姓の族親会タイプの同姓団体の事例から小括として言えることを考えてみる。1949年の新中国成立後、宗族が土地改革によって解体された後にも宗族意識が強く残存したことによって、第二次大戦後にタイへ渡った同郷・同姓者が懇親と相互扶助を目的に小規模な団体を結成した。そこにおいては、宗族的人間関係がかなりの程度維持されていた。祖国で改革開放路線が始まって以降は、郷里を懐かしみ、あるいは大陸における市場経済の発展に関心ある人々が、同郷団体や同姓団体が主催する回国旅行団に加わって中国へ旅行することが多くなった。タイへ移住した当初は貧しかった人々もタイ国の経済開発・工業化政策の恩恵を受けて豊かになったことが背景にある。

次に別の姓の同姓団体を見る。以下の事例の1つでは、タイ国の同姓団体とりわけ宗親総会がマレーシアで同姓団体が叢生した影響を受けて結成されたいきさつが明らかになる。

#### 4、張姓の同姓団体、総会とその傘下の家族会・族親会

##### <泰国張氏宗親総会>

1978年正月に張姓の者6人が集まった折に同姓の有力者である張木鴻に相談して結成準備に着手。7人が発起人となる。翌年8月に第1回会員大会を開催、張木鴻が第1－2期の理事長となる。第12期の理事長の時に寄付金を集めて会所となる建物を購入、2002年に開所式。『泰国張氏宗親総会慶祝新会址落成揭幕暨二十四週年紀念特刊』（2002年）を刊行。会所に会員の祖先祭壇があるか否かは未確認である。張氏の場合、この宗親総会よりも傘下の族親会の活動が一層活発である。

##### <総会傘下の家族会と族親会>

- (1) 旅泰（潮陽）港頭郷張氏家族総会 写真  
 (2) 泰国潮陽穀饒郷張氏族親会  
 (3) 旅泰普寧泥溝郷張氏族親会

- (4) 旅泰普寧秀隴鄉族親會
- (5) 旅泰揭揚廣福甸鄉張氏族親會
- (6) 旅泰揭揚古溝鄉張氏家族會
- (7) 泰国澄海隆城鄉互助社

以上の7団体は旧潮州府内の違う県からの来タイ者によって構成されるが、同一県の異なる郷の出身者によって別の家族会・族親会が結成されていることも確認された。恐らく異なる宗族に属したであろう同姓の張姓宗族が規模のより大きい宗族の合同組織を結成していたか否かは未確認である。なお、(7)の団体のように互助社という名称が使われているが、組織の目的が端的に示されていて興味深い。多少詳しく後述する。

以下は地方都市の宗親会である。

- (1) 龍仔\*昔府（サムットサコーン）張氏宗親會
- (2) 夜功府（サムットソクラーン）張氏宗親會



<写真> 張氏宗親總會の会所の入り口。  
バス通りに面したビルの一階にある。



<写真>旅泰（潮陽）港頭鄉張氏家族總會の  
会所内部にある会所建造費用の寄付者名簿



<写真>旅泰（潮陽）港頭鄉張氏家族總會の  
会所建造費用を寄付した会員の写真と氏名  
を掲示して顕彰している。



<写真> 会所内部に置かれた集合型の祖  
先位牌を祀る祭壇



<写真>会所1階ホールに掲げられた  
国王夫妻の写真



<上記2点の写真>故郷を訪ねた際の祖先墓および家廟での記念写真が会所に掲示されている。

### (3) 呵\*力（ナコーンラーチャーシーマー）の張氏宗親会

(3) について。バンコクの東北256 km、東北部の玄関口に相当するこの市の別名はコーラートである。ベトナム戦争時にはアメリカ空軍基地があった（1965-75年）。タイ東北部最大の商業都市であり、アユタヤー朝のナーライ王が建設した都市である。その後、現王朝のラーマ4世王の時代に商業が発展した。バンコクと東北部の物産集積地であり、1900年にはバンコクとの間に鉄道が開通した。これにより東北部の米がバンコクへ輸送された。現在では工業団地があり、日本や台湾資本の工場が操業している。

組織は1978年成立。これに先立ち上記(3)の泥溝張氏族親会がこの地に1952年に成立していた。1978年にこの族親会が18万パーツを寄付して宗親会設立を企画。120人の張姓が集結して、張声純が第1期理事長に就任した。

### (4) 張氏宗親總會スリン聯絡処、

この地方には潮陽県赤寮下郷谷饒張氏親族会と港頭郷張氏家族会の会員が多い。連絡所設置のいきさつは未確認である。

他に、広東省潮州地方からの来タイ者ではなく、海南島出身者の泰国海南張氏宗親会（1982年）、および客家系3団体がある。

個別の總會傘下の個別団体のうち2団体について以下に記す。

## <旅泰普寧泥溝郷張氏族親会>

泥溝郷は県城の北方\*火寮原鎮の北西に位置する。普寧県の泥溝郷からは18世紀中期に最初の出稼ぎ者がバンコクへ渡った。出身者のタイ国内での地理的分布は、1989年頃の族親通説録の記載によれば、タイ東北部が最多で約270世帯、バンコクとその周辺に約230世帯、東部地方に約110世帯、南部と北部にそれぞれ20-30世帯が居住していた。職業を見ると貿易業、繊維販売、交通運輸、建築資材販売が多い。

## <泰国潮陽穀饒郷張氏族親会>

この団体では、以前にも訪問したことがあったので、資料の入手に成功したためやや詳しく報告する。資料は以下に示す通りであり、組織結成の10周年、新会所の落成記念、故郷の共通祖先である創大祖の記念位牌を祀る式典の3件を記念して刊行された不定期刊行物である。『成立十週年紀念暨新址落成揭幕・創大祖祠晋祠大典特刊』1992年刊

穀饒の旧称は赤寮下であり、現在の名称は華光である。1927年から穀饒と呼ばれた。県城の北方26公里に位置する。1990年現在、鎮の総世帯数は18 7 14、人口10796人。練江によって汕頭市へつながる。

1937年頃18人がバンコクにて集まって赤寮郷会が結成される。第二次大戦後、郷里より多くの移住者が来タイした。1972年農暦1月11日に故郷の大宗祠での行事「食月半」に因んで春節懇親会を実施（食月半衆餐会と命名）し、後には会員子弟に奨学金授与式を実施した。ここに族親会の活動が始まった。1980年には会所新設の準備開始し、会所は紹認堂と命名された。1992年に、親族会成立20周年記念を迎えた。

この頃の会員数は、バンコク在住者144人、その他地方169、カンボジア4名であり、地方在住者も多い（チャントブリー、サラブリー、チャチュンサオ、ランパーン、ペチャブリー、ラーチャブリー）ことがわかる。

19世紀半ばには赤寮下と呼ばれたこの地域からは張姓を含む華工（苦力）がインドシナへ搬送された、と伝えられる。タイ、ベトナム、カンボジア、マレーのペナン島へ出る者が多かった。

郷里にある穀饒の張氏大宗祠は穀饒郷の始祖（1368-1398）である創大公を祭祀する。1675年（清康熙14年）に建造された当時には祭祀用の共有田（蒸田）が12畝、1728年には蒸田300余畝あった。埠頭には宗族の共有財として店舗200軒を所有した。

別の資料は以下のとおりであり、これが最新資料である。

『泰国潮陽穀饒郷張氏族親会成立三十二週年紀念』（2006年刊）、総頁数147頁

この族親会のタイ語の登録名称には郷里の旧称と同音のタイ語を使用している。また登録のための団体の種類を慈善基金会としている。食月半、春祭、秋祭が3大行事とされる。

<上記資料182頁の会員による回顧記事>は興味深いので紹介する。

第二次大戦後、1946年に汕頭船務会社は3000-4000トンの貨物船を客船に改造してタイへ旅客を運送した。毎回の出航では4000-6000人を乗せたので、過積載状態であった。当時、タイは厳格な入国制限をしなかった。しかし、1947年には移民数を1万人に制限した。1949年には台湾からも含めてわずか200人と制限した。そこで、マカオでポルトガル国籍を取得して入国する裏技も利用された。

<上記資料に掲載される会員および家族の個人略歴> を引用しておく。なお、日本で

は個人情報に当たるので、資料入手時に提供者側から特に取り扱いに注意するように指示があったわけではないが、本報告書では個人名は省いて番号とする。

- (1) 2006年当時の理事長（第16代）。1949年バンコク生まれ、サンペンで店員としてスタート。
- (2) 1923年サラブリー生まれ。父は17歳で故郷から来タイして行商人をした。母親は現地生まれ。本人はバンコクで中学終了後、タマサート大学法学部卒業、弁護士、第7, 8, 9代の理事長歴任。
- (3) 両親が郷里よりチャンタブリーへ移住してから本人が現地で出生。港で労務に従事した後に船を所有して漁業に就いて成功した。第10代理事長。
- (4) 1927年頃生まれ。戦後19歳の頃に郷里より来タイ。バンコクからチャンタブリーへ転居後、オートバイ販売店を開業。族親会初期から会員。第12-13代理事長
- (5) 1929年頃バンコク出生。行商人（食品）の家庭に育つ。15歳まで家業の氷販売を手伝いをしたため、学校教育を受けなかった。その後、薬剤店で働きながら独学して薬剤店開業。
- (6) 1953年生まれ。父は郷里より来タイ。家は貧しく中学へは進学せず、レストランなどで働く。建築業界で働いたのち、鉄筋販売会社を設立。後にステンレススチールの将来性を考慮してスペインのメーカーの製品販売を手掛ける。やがて1994年自ら工場開設。20歳の時から族親会に関与。
- (7) 1950年郷里にて華僑の家庭に生まれる。長男。中学まで郷里で教育を受ける。1976年にタイ南部のナラーティワート在住の父親から仕事を手伝うように依頼されて渡タイ。来タイ前の1年間香港で店員。1985年父親死亡後には、継母を助けて働く。米穀販売業。族親会の永遠榮譽顧問。
- (8) 発起人の一人。1927年上海生まれ、幼少時に母と共に郷里へ戻る。中学まで教育を受けた後、戦後にタイへ移住。
- (9) 名誉理事長 1926年バンコク出生。両親は郷里より来タイ。当時、華文学校は認可されていなかったため、学校教育を受けず12歳から働く。28歳の時に友人と家具店開業。やがて家屋内装業を開業。潮州方言に熟達。
- (10) 1926年郷里にて出生。3歳未満の時に父親はタイへ華僑として出国。母と二人で、父からの送金によって生活した。不十分な金額であったので貧困生活。日本軍による汕頭侵略時に、カンボジアへ行った母と生き別れた。戦後1945年に来タイしたときには父は既に病没していた。庶母も1944年に帰国していた。カンボジアから渡タイした実母・弟・妹と共に暮らす。ペッチャブリー在住の親戚は自身が汕頭へ戻って開業しなければならなかったため、彼が布地販売業の営業引き継いだ。1948年にはバンコクへ出てサンペン地区で販売員となる。バンコクでは1951年25歳の時、父の友人が知人と共同経営する会社に役員として入社。父の友人は老齢のため帰国の必要があったため、身分を譲り受けた。会社はタイの物産輸出。族親会の名誉理事長。
- (11) タイ生まれ。タイ東北部で精米工場5か所を経営。粳つき米の購入・精米・米穀貿易を行う会社の一つである。業界団体の副理事長。父は中国から来て以降に米穀売買業をしていたが、彼は小学卒業後に家業を手伝う。1987年から精米工場経営。
- (12) 父は終戦直後に来タイ。1964年からプラスチック工場経営。本人はタイ生まれ小学校3年からシンガポールの中学校へ進学。帰国後に家業を手伝う。1976-1993年はこの業界の発展期だったので父の会社は大きく発展。父は1993年に67歳で死去。父は族親会の理事だった。会社は業界の中では中規模の企業。従業員数3,000人余、売上2億バーツ。国内の外国企業にプラスチック部品を提供。本人は族親会の14-16期

副理事長。

- (13) 父は第二次大戦後の1947年来タイ。父は廃品回収から始めて、やがて鉄材を大手企業に提供する業務に発展させた。父親の事業を継承し、本人創業のプラスチック製品製造業も。族親会でも父の役割を継承。
- (14) 1967年にチャチューンサオ出生、サラブリーへ転居。父は郷里より来タイして果実・雑貨商を営む。30年前にバンコク郊外へ移住して布地販売業に転身。不動産業にも進出。1991年には商業店舗を開発・販売。高級住宅販売も手掛ける。
- (15) 両親はタイ国出生。母はチョンブリー出身であり、鮮魚販売業。

以上からわかることは以下のとおりである。

会員のうち親世代は第二次大戦後にタイへ移住して苦労しながら事業を起こした。経済的に成功した会員は多額の寄付金提供が義務付けられる団体の役員に就任。簡単な聴き取りによれば、息子世代が父の所属する団体に属することは珍しい由。しかし、稀に事業を引き継ぎ、同じ団体に所属する息子もいる。父世代の取引関係を引き継ぐことが重視された場合であろうか。

## 5、泰国周氏宗親総会の傘下にある家族会、族親会

### <泰国周氏宗親総会>

1962年に10人が発起人となって設立準備開始。翌1963年3月政府登録。1996年1月に大宗祠完成。第6期理事長は建造費の一部として1000万バーツを寄付。シンガポールの南洋周氏総会、故郷の揭陽市伯勞浦郷の周氏宗祠管理委員会、泰国周氏南益公族親会、中国潮陽市洒水の周氏大宗祠からも各10万バーツ寄付。

『泰国周氏宗親総会成立二十五週年紀念特刊』（1989年刊）によれば、1950年夏にシンガポール在住で潮陽県玉峽溪尾出身の周漢人がタイへ来て東南アジアの華僑についての資料を探しに来ていた。この折、周鴻鈞ほか歓迎した。シンガポールからのその客人は南洋周氏宗親会<1954年創設、前身の星州周氏公会是大戦前に成立していた>の理事長）であった。彼はマレーシア各都市では同姓団体が多く結成されていると伝えた。

その後、周鴻鈞は宗親会の結成を思い立った。また、1958年に香港在住の周百齡（嶺南大学卒業生、広東の県長、潮州の周氏家族自治会の主席）は香港周氏宗親総会<1948年創設>について情報を提供して、タイでの宗親会の結成を促した。この二人の影響が大きかったと伝えられる。

タイで華僑組織の結成を規制する政府の方針が緩むと、多くの同姓団体が認可されるようになった。1961年秋、周鴻鈞は潮州会館の訪台湾団体に加わって第1回華僑工商企業管理高級座談会に出席した際、香港から来ていた香港周氏宗親総会理事長の周環と同席した。帰国途上に香港の周氏宗親総会を訪問した折、同会の役員による歓迎宴会が催された。

周鴻鈞は泰国周氏宗親総会の発起人であり、かつ第1期から第3期までの副理事長であった。その後は永遠名誉会長（第10期まで、その後死亡か）就任。彼はバンコク銀行の創始者の一人である陳弼臣や周修武とは作新学校の同学。アモイの集美高級師範、上海芸術大学を卒業後には潮陽県立中学校の校長をした。その後に渡タイ。1941年に中国へ戻り、救国工作に参加。バンコクの中華増医所の副理事長。泰の学校や新聞の創設に発起人として関与。潮陽同郷会の発起人でもあった。

タイにおける宗親総会の草創期のエピソードではあるが、海南系および客家系の団体はこれに先んじて、1950年代に結成されている。周姓の宗親総会は潮州人の同姓団体としては確かに初期の成立である。設立当時の事情を知る人物が書いた記事として文章化されて

いるのは貴重である。

### <泰国周氏南益公族親会>

『泰国周氏南益公族親会成立十週年紀念特刊』1998年刊

1988年7月成立。先祖である南益公夫妻は福建省長樂県五華郷より三子を伴い約600年前に広東省潮州府普寧県南郷へ移住した（水寨郷の周氏五世祖玉公の5人の息子の一人として分派した）。

周遠迅は民国35年（1946年）年秋に故郷の玉祖祠を参拝した折、水寨郷長から周氏族譜を見せてもらった。二世祖の息子5人はこの地方に分居し、子孫の人数は三房、四房、二房、五房の順に多く、中心部の人口は2000人を超え、一族の総人口は1万に及んだ。周氏宗祠が現存する。1946年には初祖の墓が修築された。

タイ国内各地に族親会の連絡処がある。バンコクとその近郊在住者が最多。南部のソクラ、北部のランパーン、中南部のラーチャブリー、ペッチャブリーなどにも多い。

### <旅泰掲揚伯勞浦郷周氏家族会>

『旅泰掲揚伯勞浦郷周氏家族会成立十五週年紀念特刊』1989年刊

最も早期の伯勞浦郷出身の渡タイ者はトンブリへ来た周錦榮の祖父である。その後1917年から渡タイ者が増加。それに続いて1920年代以降に多数が来タイ。その後では第二次大戦後が多い。バンコク市内三角路仙公巷一帯に多くが住み、金属回収業に従事する者が多かった。第二次大戦後は中古車販売業に従事する者が増えた。

1974年4月に家族会結成のための準備会が発足。会所は周炳章の会社に置かれた。同年9月に登録。合法慈善団体となる。1975年1月会所開設の儀式を実施。1989年当時の会員数は162人。1983年にはタイ南部水害被害者救援金として首相に75000パーツを寄付。

1987年には回梓謁祖団を組織して郷里を訪問。1990年には郷里の掲陽県梅雲鎮からタイへ訪問団が来て交歓。以下は会員について資料に記載された記事。

- (1) 1919年生まれ。家族会の永遠名誉理事長。泰国周氏宗親總會の顧問、掲陽会館顧問。会社経営者。1958年来タイ。バンコクで就職。家族会の発起人。第1-5期の理事長
- (2) 1916年貧農家庭に生まれる。1935年に渡タイ。発起人の一人。たらいやバケツを製造する会社を興す。
- (3) 1920年生まれ、1941年来タイ。同姓者の会社に勤務後、自分の会社を設立し、一族で経営。家族会の副理事長。宗親總會の副理事長、掲陽会館理事
- (4) 1925年生まれ、1946年来タイ。金属回収業を興して成功した後、建築会社や不動産会社を経営。家族会の副理事長、宗親總會理事。
- (5) 1922年生まれ、1946年来タイ。金属製品販売会社を興す。現在は日本車の販売店経営。家族会の副理事長、宗親總會の理事、掲陽会館理事。
- (6) 1921年生まれ、20代になって来タイし、叔父の会社に勤務し、引き継ぐ。族親会の副理事長
- (7) 族親会の副理事長、宗親總會の理事、掲陽会館の理事。会社経営
- (8) 1923年生まれ。20歳過ぎになって来タイ。家族会の顧問。会社経営。不要金属回収業から始めて、金属器製造会社を起業。

- (9) 1927年バンコク生まれ。夫が周姓。原籍は饒平県。家族会顧問 2014年9月没。1945年から実弟と共に金属関連会社を経営、家族会顧問。泰中友好協会副主席、泰中促進投資貿易商会副主席、泰国潮州会館副主席、泰国中華総商会副主席、泰国呉氏宗親総会副理事長、饒平同郷会名誉理事長。
- (10) 1922年生まれ、1946年来タイ。中古車売買業から始め、現在は自動車バイク店を経営。家族会顧問
- (11) 生年不明。バンコクの華僑学校にて初・中等教育を受ける。卒業後は父の金属加工業に従事して発展させる。父親はこの家族会の初期の理事。総会の理事、家族会の役員を経験。
- (12) 1929年生まれ、1958年来タイ。古物商に従事した後に自動車修理業。家族会役員。
- (13) 家族会常務理事、家族会役員。タイ国機械公会副理事長。1940年生まれ。親と共に来タイ後、バンコクにて中等教育を受ける。運送会社の経営者。
- (14) 幼少時の1933年来タイ。古物商か始めて会社を興す。家族会常務理事。
- (15) 家族会常務理事、1943年バンコク生まれ、発起人・第1期理事の周河水の息子。華僑学校にて中等教育をうける。
- (16) 1927年生まれ。1946年来タイ、古物商から始めて会社を興す。家族会常務理事、宗親総会理事。不産会社経営。
- (17) 1924年生まれ、1946年来タイ。父の会社で働く。会社経営者。家族会の常務理事
- (18) 1937年生まれ、1957年来タイ。兄の会社で働く。後に独立して会社経営。家族会の常務理事
- (19) 1919年生まれ、20歳ころ来タイ。古物商から会社設立へ。家族会常務理事、
- (20) 1930年生まれ、1946年来タイ。叔父の五金行で働く。後に古物商開業、自動車部品の販売会社経営。家族会の常務理事。

## 6、マレーシア、ペナン島の五大姓による公司

福建省南部出身者が結成した宗族の海外分会的な組織として始まる。宗祠や大宗祠を有する。タイの同姓団体成立に影響を与えた可能性があるが、未確認であり、今後の課題としたい。

- |                                       |       |
|---------------------------------------|-------|
| (1) 宗徳堂謝氏 (1820年以前に成立)                | 海澄県石塘 |
| (2) 霞陽堂楊氏 (1841年) 応元宮 (郷土神を祭祀)        | 厦門の霞陽 |
| (3) 龍山堂邱氏 (1835年に組織、102人が寄付して1850年完成) | 海澄県新江 |
| (4) 九龍堂林氏 (1863年あるいは1866年建造)          | 惠安県錦理 |

以上4姓の団体は漳州府の三都の単姓村の宗族出身者によって結成。

- (5) 穎川堂陳氏 (1878年建造) 1857年に威惠廟として。漳州および潮州出身者によって結成された。

※著者に無断での引用不可